

発刊にあたって

野 口 道 彦

(大阪市立大学人権問題研究センター所長)

この度、大阪市立大学人権問題研究センターでは、近代の部落問題に大きな足跡を残した上田静一に関する資料と論考を集成した本書を発刊する運びとなった。上田は一八八四年(明治一七)に大阪府南河内郡東條村(現・富田林市)に生まれ、京都府師範学校(現・京都教育大学)を卒業して京都市内の小学校教員になった。そして京都市内の被差別部落である田中部落に入り込み、親友夜学校を開設して教育活動に携わるとともに、部落改善事業に尽力した。また部落改善運動のなかから部落民衆の北海道移住を推進し、自らも部落民衆を引き連れて北海道に移住した。北海道移住については失敗したものの、一九五三年(昭和二八)に亡くなるまで田中部落の人びとに慕われ続けた。

このような上田の活動については、白石正明氏による「上田静一と田中親友夜学校」(『京都部落史研究所報』第三三―三五号、一九八〇年九―十一月)と「上田静一小論―親友夜学校と北海道移住―」(『解放教育史研究会編「被差別部落と教員」』明石書店、一九八六年)という先駆的な研究がある。このように上田は部落問題において重要な人物であるにもかかわらず認識度が低いせいも、部落解放・人権研究所編「部落問題・人権事典」(解放出版社、二〇〇一年)では残念ながら立項されなかった。

上田の重要性を認識させる契機となったのが、二〇〇二年の大阪人権博物館による上田静一資料の収集であった。それまで上田に関する資料は帝国公道会の機関誌「公道」の断片的な記事とともに、上田が北海道へ移住した後の動向を詳細に記した「上田静一日誌」(『京都部落史研究所紀要』第三―五号、一九八三年三月―一九八五年三月)と「田中親友夜学校沿革史」(『京都部落史研究所編「京都の部落史」』第九巻、阿吽社、一九八七年)が知られているくらいであった。大阪人権博物館が収集した上田静一資料は本書に紹介する「上田静一資料目録」でも窺い知れるように質量的に上回るのみならず、上田の思想や

動向を詳細に追えるものである。

大阪人権博物館では上田静一資料の重要性に鑑み、担当の朝治武氏を中心に上田研究の先駆者である白石正明氏と部落の北海道移住について研究を進めていた大藪岳史氏の参加を得て、二〇〇四年度から共同研究を推進することになった。その成果は『大阪人権博物館紀要』第九号（二〇〇七年一月）に特集「上田静一と部落改善事業」として纏められ、ここには白石正明氏による「田中親友夜学校と上田静一」と朝治武氏による「京都・田中部落の改善運動と上田静一」の二論考とともに、大藪岳史氏の作成による「上田静一年譜」と「上田静一資料目録」が掲載された。また『大阪人権博物館紀要』第一〇号（二〇〇八年三月）には、大藪岳史氏の「北海道移住と上田静一」が掲載された。

大阪人権博物館では白石・朝治・大藪各氏の論考とともに上田静一資料の中から重要な資料を翻刻して、上田に関する共同研究の集大成として報告書を纏める計画を立てていた。しかしながら昨今の厳しい財政事業により、この計画は頓挫することになった。そこで計画の頓挫を知ることとなった大阪市立大学人権問題研究センターでは、上田静一が部落問題に占める重要性から、この計画を大阪人権博物館から引き継いで実現することとした。

ここに『人権問題研究』の別冊「資料集 上田静一と被差別部落―明治・大正期を中心に―」として上田静一に関する重要な資料を紹介し、あわせて論考を纏めることは、次のような意義を有すると思われる。まず第一は、部落問題にかかわる教育活動の意味を明らかにすることである。田中部落の教育状況をふまえて上田は親友夜学校を設立し、自主的な教育活動を展開したことは、今日の部落問題に関わる教育活動に投げかける意味は大きいと思われる。第二は、部落差別を撤廃するために展開された部落改善運動の意味を検討することである。上田の指導によって設立された田中部落における青年団や自主的改善団体の活動は、部落解放運動に繋がる活動として重要であろう。そして第三は、部落民衆の移住・移民の意味を探ることである。上田は部落民衆の北海道移住を推進したが、このことは今日における部落民衆の部落外への移住や国際的には故郷を喪失して他郷で生きるディアスポラ状況を考えるうえで大きな示唆を与えるであろう。

なお最後になったが、大阪人権博物館をはじめ共同研究に参加され、本書の完成に尽力された白石・朝治・大藪各氏とともに、資料の翻刻に協力された竹森健二郎氏と高木伸夫氏に深く感謝申し上げる次第である。